NO. 56. 2000. 3. 31.

「芦浜に乾杯！」―芦浜原発白紙撤回！！

きのこの会　早川しょうこ

この日の来ることをどんなに願ったことでしょう。

芦浜に向かう道々に、芦浜に原発がこなくなった時こっそり来て、涙を一人流しましょうか。それともビールを一人飲みましょうか。海岸に立ち素っ裸になって「おーい、喜べ～勝ったよ～。これからもみんな生きられるんだよ～。」と草や木や鳥や獣たち、うぞうむぞうの生き物達に向かって叫びましょうかと。そう、遠い夢だと思っていたのです。

３７年間反対しつづけた漁師さんは言いました。「原発ができて町が良くなったら、わしはすまなんだと子や孫に謝ればいいんや。だけどもな、できてしもて自然が汚れてしまったら取り返しはつかんのや、謝れんわな。だでわしの人生をかけて反対しとるんやで…。『原発』が来たのはわしが２５の時や。今は還暦も過ぎや。

気いついたら今の歳やでな、浦島太郎みたいなもんや。自分の人生振り返ったら原発反対しかなかったんやからな。」彼の目は海上に漂うどんなに小さいものも、はるか沖合いのほんの少しだけ海がせり上がって見える、ヒヨドリの大群が島づたいに渡っているのを見逃しませんでした。

「ほれ！ヒヨドリが渡っとる！」「エッ！どこ？」「見えんのか、あれが」「見てみい隼がヒヨドリ捕まえて飛んどるだろうが」それらしきものがスーと飛んでいったのは見えたのですが…。その時私は、高性能３０倍の望遠鏡を一生懸命覗いていたのに、海で鍛え上げた彼の方がずっとずっと優れていたのです。

芦浜に乾杯！海の目と心を持つ漁師達に乾杯(完敗)！

〒466－0822　名古屋市昭和区楽園町１３７　１－１０
チェルノブイリ救援・中部　代表：田中良明
郵便振替　：００８８０－７－１０８６１０
TEL／FAX：０５２－８３６－１０７３（月・水・金　10：30～15：30）
E-ﾒｰﾙ　：chqchubu@muc.biglobe.ne.jp　（地下鉄杁中駅より徒歩１２分）

代表団ウクライナ訪問記（2000.2.11～2.20）

ー障害者たちの厳しい現実ー

田中良明

ジトーミル州内で行政に登録されている事故処理作業者は 12,855 人。そのうち1級から3級の障害者からなる第1カテゴリーは 6,296 人です。この障害者になった事故処理作業者を対象に、相互扶助的支援活動を行っているのがチェルノブイリ障害者協会です。今回の訪問のおりに、タビノヴァさんほか 3 人からお話を伺いました。

【協会は 93 年に設立された。代表（タビノヴァさん）、副代表、運営委員 3 名の 5 名で運営されている。主な活動は、会員に法的な助言を与え、精神的なサポートをすること。救援・中部からの支援を除いて、公私ともに一切の支援はなく、会費もとっていない。集まった会費は収益とみなされ、税金を課せられるからである。

90 年にチェルノブイリ事故被災者に対する公的支援の法律ができ、病院の治療費・薬剤費の無料、サナトリウム利用券の配分、汚染されていない食料を買う費用の支給、家賃・公共料金 50%割引、その他合計 20 ほどの特典が定められた。この制度は 93、4 年までは有効だったが、それ以後は機能していない。財源であるチェルノブイリ税の税率が下げられ、基金が足りなくなったのが原因である。チェルノブイリ税は 98 年 6 月に廃止された。昨年は、サナトリウム利用券と公共料金 50%割引だけが実施された。薬剤費は 98 年に 1 人年間 15 グリブナ（約 300 円／年）に制限されたが、それすら政府が補填しないので、薬局は薬を出さなくなった。これからも公的支援は削減されそうである。現在、削減の法律が提案されており、全ウクライナチェルノブイリ障害者基金は抗議のピケを行っている。

ウクライナには公的な医療保険制度は存在しない。障害者に対する年金は、1 級障害者の最低額 208 グリブナ、2 級障害者の最低額 176 グリブナから 3 級障害者の最低額 140 グリブナである。報酬比例制であり、若くして障害者になったほとんどの事故処理作業者の年金は最低額に近い。

事故処理作業者は 1 年間に 1200～1500 グリブナの薬剤費を使っている。ちなみに、検査 1 回で 15 グリブナ、レントゲン 10 グリブナである。先日入院したタビノヴァさんは、検査料だけで 80 グリブナかかった。病院はすべて公立であるが、国からは必要経費の 3 割しか出ないので、患者から徴収するしかないのである。

一般の市民はチェルノブイリ事故被災者に対してほとんど関心をもっていない。ウクライナ独立によって事情が変わり、単独で解決しなければならなくなったからである。経済状態が悪い中で、やっかみさえある。さらにニセ事故処理作業者の存在が、状況を悪化させている。】

＜前列左から 4 人目が田中代表＞

状況はきわめて厳しいといわざるをえません。それだけにチェルノブイリ障害者協会の活動は貴重です。これからもできるだけの支援をしなければならないと痛切に感じました。

冬のウクライナで温かい歓迎

大垣・むらさきつゆくさの会　大谷早苗

想像もできない寒さを覚悟して、私はウクライナに降り立ちました。温かい歓迎と、意外な気温の暖かさとに、長い旅の疲れも、緊張していた心もなごみ、とうとう来てしまった事に胸のたかなりを感じました。ただ、広大で豊かな大地は今、休眠中で花もなく実りもなく、静かなたたずまいでした。

今回の訪問で奨学生達に面会し、一人ひとり将来の抱負を語ってもらいました。奨学生は教育大学と基礎医学専門学校で学んでいて、「立派な先生になって村の学校で教えたい」とか、「自分に納得できる仕事をしたい」と語り、しかし一方で、今年卒業するけれど職場がないといった厳しい現実もありました。奨学生のなかには病気をかかえている人もあり、どことなく元気がなくてつらいのが、こちらにも伝わってきます。

でも日本からのお小遣いを代表から一人一人に手渡された時の、あの嬉しそうな笑顔は忘れられません。

どうか、この学生たちの夢がかないますように、そして健康でありますように願わずにはいられません。

念願のウクライナの地へ

金子　透（フリーカメラマン）

年も明け、2000年２月、念願のウクライナへ専門家派遣という形でそれは実現する事になった。

僕個人の参加目的は、人々の生活、チェルノブイリの原発事故により被災した人達の現状を知り、それをフィルムに収め、日本での救援活動に少しでも役立てて頂ければという思いからでした。

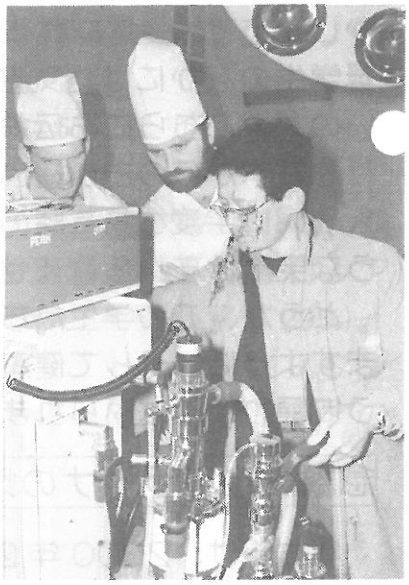
しかし、スケジュールの都合、体調を崩した事が原因で、結果としては不満が残るものの、今回の訪問で、その地を訪れ多くの人々の思いを体感できた事が何よりも収穫でした。普段、慣れ親しんでいる日本での生活を少し離れ、不自由ではあるけれど慎ましやかな生活をしている人々に囲まれ、自分自身の価値観を見つめ直してみる良い契機になりました。

＜奨学生の皆さんと
中央が金子さん＞

医療支援活動報告

臨床工学技士 北野達也

第一目的は、チェルノブイリ救援・中部により１９９１年以降、現地医療施設に納入された医療機器の使用状況および所在確認、そして点検・修理であった。私は初参加であったので、渡航前に河田事務局長を通じ現地の状況を事前に把握し、医療施設の供給電源・医療ガスなど病院内設備の有無を考慮した上で医療機器部品・測定機器・教材等を準備した。開発途上国での活動経験はあるものの初めての渡航地であるので不安は隠しきれず、無事任務を終えると同時に１４年前のチェルノブイリ原発事故で被災された方々の現状を知り、理解を深めることにより、更なる支援活動の拡大を願っての渡航であった。今回、ジトーミル州立小児病院・ブルシロフ地区病院においての状況調査・その他呼吸療法全般・麻酔管理においての指導も行なった。



＜ジトーミル州立小児病院＞

① １９９９年購入麻酔器は、Dr.ニコライと麻酔士により管理運用

② 人工呼吸器・保育器・酸素濃度計・パルスオキシメーター・輸液ポンプ・シリンジ･ポンプ等機器の絶対数不足

③ 医療技術者などがいないため院内医療機器の定期点検・修理が不可能な状況で、故障し使用されずに眠ったままの医療機器もあった

④ カニューレなど診療材料・人工呼吸器などの不足

⑤ 国の経済状況などにより、病院運営が困難である

＜ブルシロフ地区病院＞

① 支援医療機器備品を有効に活用している

② 自立運営の兆しが伺えた

③ 新築移転につき数々の医療機器の必要性

④ 内視鏡・心電計・人工呼吸器の不足　⑤ 記録紙などの消耗品の不足…往診のみに使用しているイタリア製記録紙は高価なため、院内用はファックス用感熱紙を加工して使用

いずれの病院においても支援された医療機器は有効に活用されており、責任を持って管理されている。ただ、絶対数が少ない上、病院の備品であるハンガリー製の保育器など老朽化て、修理不能の医療機器もあり、これらの機器の大半は新生児などの生命維持に直接影響を与える人工呼吸器や保育器で数が足りず、残念ながら亡くなっていく乳児もいる。診療材料についても購入するための費用が無く、再使用により感染症が発生している…。痛ましい現状であった。

今回、代表団の一員として参加してチェルノブイリ原発事故による後遺症で不安な日々を過ごす被災者の方々の実態を知り、また、ウクライナにおける医療・福祉・教育制度・政治・経済的状況を知ることにより、相互理解を深めることができた。今後も臨床工学技士としてだけではなく、一人の人間として、これからの子ども達が自国にて自立するために継続支援を行なっていきたい。そして、原子力発電所による事故が起きないことを願ってやまない。

１９８６年4月２６日のチェルノブイリ原発事故から１４年目を迎えようとしている。忘れてはならないはずであったのに…昨年9月３０日東海村臨界事故が起きてしまった。

戦後５０年の空洞化現象？ 自分達の後世に何を残せるのか！？ 一人一人真剣に考え、少しでも良い環境が維持できるよう取り組んでもらいたい。

スタデイー・ツアーから考えること

若山秀夫

「チェルノブイリ原発の石棺近くまで行ける？面白そうだな。」という不謹慎な会話から、あれよあれよという間にスタデイー・ツアーに参加することになった。1977 年に大学の研究室の企画で、ライン川をスイスからオランダまで下って調査する旅に参加して以来、２ 度目の海外旅行。当時取得した「数次旅券」はとっくに期限切れのため、その再取得やら何やらで忙しいうちに出発することとなった。

出発に先立って、河田さんから仰せつかったのは、ウクライナの水事情を調べること。言葉が通じないこともあって、分ったのは、我々が滞在したジトーミル市の上水は３０Ｋｍ（？）ほど上流のテテレフ川から取水し、浄水場で浄化した後供給されていることくらいだった。宿舎のシャワーはお湯がでないかも？と事前に聞いていた。そういう事はなかったものの、飲み水としてミネラルウオーターが手放せないことや、州政府が入っているビルですら、大便器は ２ ケ所のうち１ケ所、小便器は３つのうち２つが使用不能の状態であるなど、日本の水事情とは格段の差があった。

チェルノブイリ原発の石棺から２００ｍほどの所で見学したが、ガイガーカウンターはすさまじい勢いで鳴り続け、名古屋の放射能濃度の１００倍程度を示していた。そんな場所に、火災や事故に備えて消防署があり、被曝量を考慮した交代制を敷いているとはいえ、職員が働いている。1986 年の事故の際に、初期消火や救援活動に従事した消防署員、軍人、ボランテイアなどのうち、約 7 割の人々がこれまでに亡くなっているという。私は、名古屋市役所に勤めており、この様な事故が発生した時には現場に駆けつけなければならない立場だが、果たして、職員のうち何人が現場にいくだろうかと考えさせられた。多分、消防局の職員は行くだろうけど、私の所属する土木局の職員は？？？ そんな事を考えながら日本に帰ってきたら、ＪＣＯ東海事業所の臨界事故で消防署員が被曝。大内さんが亡くなられた。この問題は、公務員全体の問題として考えるべきテーマだろう。

もし！？静岡・浜岡原発で放射能漏れ事故が起きたら
その時、あなたはどうしますか？

4月23日〔日〕、原子力事故の自主防災訓練を行います。あなたも参加しませんか。

〔目的〕

1979年のスリーマイル島事故、86年のチェルノブイリ事故は、原子力発電所で事故が起こると、放射能による深刻な被害が大地や人々に及ぶことを教えてくれました。昨年のＪＣＯ臨界事故は、さらに身近に原子力災害が起き、住民が放射能にさらされる可能性を示しました。急性障害で亡くなった大内さんを始め、たくさんの住民が被災しました。

国など行政の指示を待っていて、住民は身の安全を守れるのか？情報は正しく、速やかに伝えられるか？いざ避難というとき、どのように、どちらへ逃げればよいのか？どこまで逃げるのか、避難先はあるのか？食べ物は、寝るところは？小さなこどもたちはどうたるのか？等、不安でいっぱいです。

52機もの原発、その他関連施設が稼動している狭い日本では、原発現地の人々のみならず、風向きによって誰でも被災者になりえます。そこで、チェルノブイリ事故１４周年に近い４月23日〔日〕、原発事故を想定した自主避難訓練を行い、自ら避難者、あるいは避難者の受け入れ側となって、原子力災害を自分のこととして捉え、原因を生み出す原発について、また原発に替る新エネルギーについて考えたいと思います。ご家族そろってご参加ください。（参加費500円）

〔訓練内容〕

４月23日〔日〕

7:30　中部電力　浜岡原発で事故発生
　　放射能測定器ネットワークで異常値検知（通常の10倍）

7:45　放射能問題専門家が事故の規模、影響予測・協議

8:00　原発事故で放射能漏れ、30キロ圏内への影響予測
　　測定器ネットワークより、各地市民ネットワークに緊急連絡
　　住民避難〔自宅その他より自家用車、電車、新幹線などで〕
　　避難民受け入れ体制準備
　　避難所設置（名古屋市栄　矢場公園・ナディアパーク６階プレゼンテーションルーム）

11:00 避難者到着、スクリーニング訓練
　　救護所設置、救急医療訓練、ヨウ素剤配布

12:00 炊き出し

14:00 現地からの避難者（浜岡、石川、岐阜東濃）の報告会「原子力防災を考えよう」。　自主防災訓練のまとめ（専門家）

16:00 終了

〔その他〕

＊　非常持ち出し、避難の心得など防災マニュアル作成

＊　放射能測定器、防災グッズ等の展示

＊　災害弱者(障害者、老人、こどもなど)の避難を考える

＊　2/1（浜岡原発）、3/23（敦賀原発）の、県他の防災訓練を検証し、より有効なものを求める

＊　日本各地の原子力防災計画の比較、検証

＊　「アースデイ 2000」会場他、市民に原発の危険性、防災訓練の有効性・必要性についてアピールする

＊　原発現地で生活するとは？現地の話を聞く（浜岡、能登、芦浜、岐阜東濃）

（原子力災害・避難の心得）

＊避難の時は窓を閉め、ドアにかぎをかける（あるいは、後から避難してくる人々のためかぎはかけない）

＊換気扇、エアコン等はすべて止める

＊冷蔵庫をのぞき、すべての電気器具を切る

＊ペットは家の中に入れ、食べ物と水をやる（ペットは連れて避難できない）

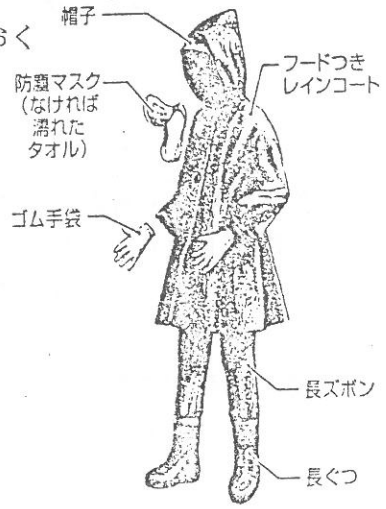
＊服装は、雨ガッパ、ゴム手袋、水中メガネ、ゴム長靴、しっかりしたマスクを着け、隙間をガムテープで密閉する

＊避難用具の入ったリュックサックを日ごろから用意しておく

＊車で逃げるときは窓を閉め、エアコンは切る

＊できるだけ隣近所の人と乗り合わせる

＊避難先を家族で確認しておく



(避難用品)

一人３日分の衣類、洗面用具、救急箱、保険証、免許証、通帳、印鑑、携帯用ラジオ、寝袋、地図、懐中電灯と予備の電池、携帯用食品、水、ミルク、オムツなど育児用品、その他貴重品など

原子力防災・市民ネットワーク　　（代表　　戸村　京子）

連絡先（昼）０５２－９６２－８６２５　早川

（夜）０５２－７３４－０９０１　丸山

（アースデイ・イベントも同じ会場で行なわれています）

スタデイー・ツアーから考えること

若山秀夫

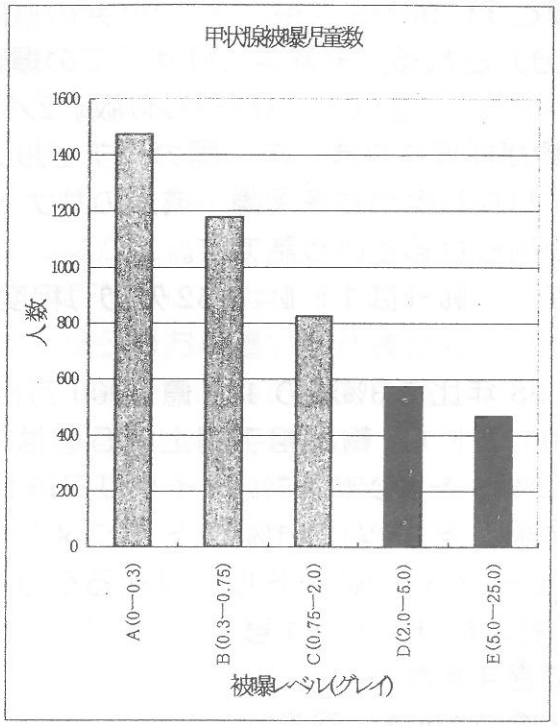
「チェルノブイリ原発の石棺近くまで行ける？面白そうだな。」という不謹慎な会話から、あれよあれよという間にスタデイー・ツアーに参加することになった。1977 年に大学の研究室の企画で、ライン川をスイスからオランダまで下って調査する旅に参加して以来、２ 度目の海外旅行。当時取得した「数次旅券」はとっくに期限切れのため、その再取得やら何やらで忙しいうちに出発することとなった。

出発に先立って、河田さんから仰せつかったのは、ウクライナの水事情を調べること。言葉が通じないこともあって、分ったのは、我々が滞在したジトーミル市の上水は３０Ｋｍ（？）ほど上流のテテレフ川から取水し、浄水場で浄化した後供給されていることくらいだった。宿舎のシャワーはお湯がでないかも？と事前に聞いていた。そういう事はなかったものの、飲み水としてミネラルウオーターが手放せないことや、州政府が入っているビルですら、大便器は ２ ケ所のうち１ケ所、小便器は３つのうち２つが使用不能の状態であるなど、日本の水事情とは格段の差があった。

チェルノブイリ原発の石棺から２００ｍほどの所で見学したが、ガイガーカウンターはすさまじい勢いで鳴り続け、名古屋の放射能濃度の１００倍程度を示していた。そんな場所に、火災や事故に備えて消防署があり、被曝量を考慮した交代制を敷いているとはいえ、職員が働いている。1986 年の事故の際に、初期消火や救援活動に従事した消防署員、軍人、ボランテイアなどのうち、約 7 割の人々がこれまでに亡くなっているという。私は、名古屋市役所に勤めており、この様な事故が発生した時には現場に駆けつけなければならない立場だが、果たして、職員のうち何人が現場にいくだろうかと考えさせられた。多分、消防局の職員は行くだろうけど、私の所属する土木局の職員は？？？ そんな事を考えながら日本に帰ってきたら、ＪＣＯ東海事業所の臨界事故で消防署員が被曝。大内さんが亡くなられた。この問題は、公務員全体の問題として考えるべきテーマだろう。

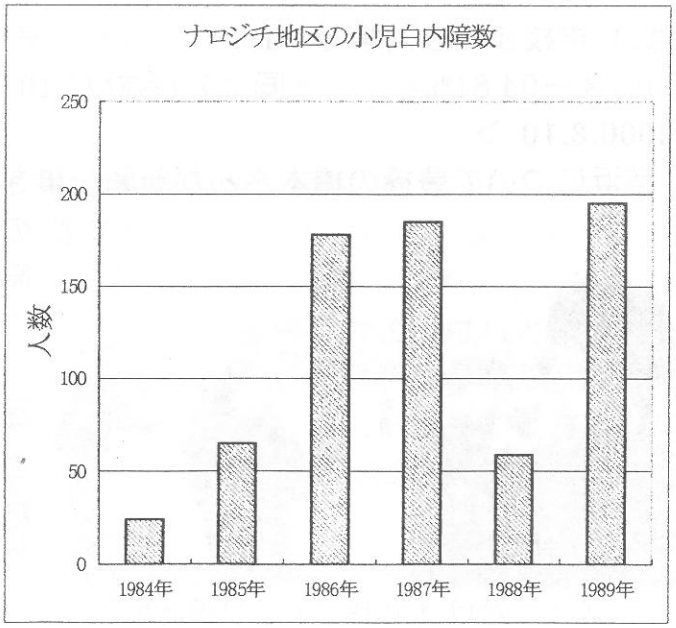
連載 17　**ナロジチ地区の子ども達の被曝と白内障発生数**

・・・元ナロジチ地区病院外科主任医師の証言・・・



チェルノブイリ事故の被曝者の被曝線量は意外に分からない。特に住民の被曝量は不明なことが多い。ここに紹介するのは、私たちが支援している、ナロジチ地区病院のもと外科主任、ボグダン・アントノーヴィッチ医師の証言である。事故当時ナロジチ地区に住んでいた約 5000 名の 15 歳以下の児童の甲状腺被曝（ヨウ素 131 による）の測定結果である。ナロジチはチェルノブイリから南西に 70Km、浜岡から豊橋までの距離である。ここでは事故当日、毎時最高 3 レントゲン（平常値の 30 万倍）の線量が観測されている。当然、多量の放射能が飛来し、何も知らずに外で遊んでいた子ども達を直撃した。左のグラフによれば、2 グレイ以上の被曝児童が 1000 名以上もいたことになる。恐ろしい数である。（単純な比較は難しいが、東海村ＪＣＯ事故で被曝した作業員 3 名はこの範囲に入る。全身被曝なら数百名死亡に相当）。通常私たちの自然放射線による被曝は同様に表せば、年間 0.1 ミリグレイ程度である。

ボグダン医師は、右のグラフに示された、ナロジチ地区の小児白内障の推移も紹介している。白内障は、一般に最も典型的な放射線障害として知られている。９通常は大人の病気だが、子どもがかかることは少ない。右のグラフはナロジチで事故後にこれが急増する様子が示されている。なお、1988 年に少ないのは眼科医が病気のため、診断が中断したためである。1989 年は 1・3 月までのデータで、たった 3 カ月間にそれ以前の 1 年分が発生している。子どもに限らず、現地で私たちは事故後目が悪くなったという話を良く聞くが、こうした訴えを裏づけるデータである。



（河田昌東）

竹内さんのウクライナ便り

（チェルノブイリ救援・中部　キエフ駐在　竹内高明 ）

＜2000.2.25＞

・ウクライナとロシアとの協定により、ガス輸入についてのウクライナの負債が 11 機の戦略爆撃機(TU-160 ８機と TU-95MS 3 機)、約 500 発の巡航ミサイルの形で返済（２億 8500 万ﾄﾞﾙ分）される。来週中にはすべての爆撃機がロシアに到着の予定。（『ｲｽﾞﾍﾞｽﾁｬｰｳｸﾗｲﾅ版』2／10 号）

最高会議で 2000 年度の緊縮予算案が採択されました。国の「チェルノブイリ基金」は廃止され、チェルノブイリ被災者の社会保障…成人のサナトリウム利用券無料提供など…がいくつか削られるという話です。

気温は少し下がって－３~４℃です。ﾄﾞﾙﾚｰﾄは１ﾄﾞﾙ＝5.52ｸﾞﾘﾌﾞﾅ程度。

＜2000.3.1＞

・1999 年度、ウクライナの輸出額は'98 年比 9.3%減の 115 億 8200 万ﾄﾞﾙ、輸入額は同 19.3% 減の 118 億 4600 万ﾄﾞﾙ。輸出相手国上位５国はロシア(32.82%)、中国(10%)、トルコ(9.22%)、ドイツ(7.67%)、イタリア(6.29%)。輸入相手国上位５国はロシア(60.5%)、ドイツ(10.1%)、トルクメニスタン(5.16%)、アメリカ(4.31%)、ベラルーシ(3.68%)。ドルに対するグリヴナのレートは'99 年中に約 38%下落。(『ｷｴﾌ･ﾎﾟｽﾄ』2／24 号)

・世論調査＝インターネットを利用できますか？

（15～59 歳の 1000 人回答）

はい、職場で－2.9%　　はい、自宅で－0.6%

はい、学校または大学で－1.39%　　はい、その他の場所で－0.9%

いいえ－94.81%　　（同上）（合計が 100%になりませんが原文のまま）

＜2000.3.10 ＞

芦浜について豊橋の橋本さんが新聞記事を送ってくれました。久々の日本のうれしいニュースです。日本の原子力政策が変わるきっかけの一つとなることを望みます。

キエフは気温６～７℃と暖かくなってきましたが、雨がちで今一つ不安定な天気です。私は来週また滞在登録の延長をしなければなりません。

＜ｷｴﾌにて…ﾄﾞﾝﾁｪﾌﾞｧ、田中、ｲﾘｰﾅ、竹内さん＞

ふりいと～く

いつもお世話になっています

市原佳代

私が「チェルノブリ救援・中部」と出会ったのは'99年5月の『ウクライナ講座』の料理編だ。それ以前の講座のことは全く知らず、ある日の朝、新聞の小さな「講座開催」の欄で、1000円でウクライナ料理を教えてくれる（それは、私の頭の中で“食べられる”と変換された）という耳寄りな記事を見つけた。

一人でボソボソと食事中だった私は、その記事にくぎ付けとなり、早速事務局に電話。その時初めてチェルノブイリを未だに（!!）支援している団体が存在し、尚かつその講座の主催者だとわかった。

“チェルノブイリ”という言葉自体久しぶりだった。2、3年前、「ユーゴで育った子どもの歯に放射能が残っていた」というドラマの中で耳にして以来だ。事故当時から特別の関心もなく、もちろん事故後の状況など知るはずもない。旧ソ連が崩壊したと同時に事故も消滅したような錯覚に陥っていた。そのチェルノブイリが、亡霊のごとく私の中に蘇ったのだった。

いつもつぶらな瞳の盲導犬を尻目に、街頭募金を避けている私の脳裏には、真っ先に「寄付を求められたらどうしよう」という思いがかすめたが、「毅然と断ろう」と、心に固く誓った。結局、寄付は求められず、欠けたお皿で手を切った私に、山盛さんが絆創膏をくださり「この団体の人は親切だなあ」という印象のもと、楽しくおいしい一日を過ごした。

救援・中部の人達の多くが“反原発派”だということは、東海村の臨界事故が起きたときに知った。

そんな私が今、救援・中部の懐に入っている。そこから得た教訓は、市民活動とはいえ、一番重要なのは人材だということだ。予算も企画も、それを有効に生かす人材が必要なのだ。そういった意味でも、「救援・中部」は非常に恵まれている団体だ。連携も素晴らしく取れている。何よりも一人一人が人間的にとても魅力的で、私の好奇心を充分に満たしてくれる愛すべき人達なのだ。そのパワーをもらいながら、ボランティアというよりは、楽しく有意義な余暇活動を今後も続けていきたいと思っている。

＜事務局便り＞

・２月のウクライナ訪問団の方々が打ち合わせや報告のために、何度か事務局まで来られました。本当にご苦労様でした。ウクライナから無事に帰られて、ほっとしました。

・キエフでの審査と許可がようやく下りて、ミルク代 450 万円を３月 15 日外貨送金しました。皆様からたくさんのミルク代カンパをいただき、前年の 1.5 倍の送金ができました。ご協力どうもありがとうございました。

＜松田＞

ーおことわりー

「ポレーシェ」を発送する際、チェルノブイリ救援・中部あての振込用紙を同封させていただいています。これはカンパや維持会員費をくださるお志のある方々の便宜を考えてしていることで、けっして毎回皆様にご送金を強要しているものではありません。事務作業の手間を省くためでもあり、ご不快に思われる方がおられましたらどうぞご容赦ください。

読者の声

・奨学生からのメッセージに感動してしまいました。（横浜市 ＡＹさん）

・ポレーシェの編集が変わったせいか、印象がかるくなった。 前の方が泥くさくて何かずしりときてよかった。（焼津市 ＳＵさん）

・長野は最近、雪が多くて、真冬にもどってしまったかのようです。昼ごろには暖かな日差しで雪がとけると、春がそこまでやってきている感じもします。ポレーシェをたのしみにしています。(長野市 ＹＴさん)

・ 生協「虹のまつり」に参加し、浜岡原発の危険性・原子力防災の不備について訴えました。（チェルノブイリ救援・榛原　ＹＭさん）

・クリスマスカードの発送ありがとうございました。ロシア語を教えてくれた友人の娘さんにも報告しておきました。喜んでくれました。（町田市　ＭＳさん）

・ポレーシェいつもありがとうございます。（芦屋市 ＫＯさん）

編集後記

「チェルノブイリ救援・中部」は、今年（2000 年）の４月 16 日で創立 10 周年を迎えます。この 10 年間のご支援・ご協力に、心から感謝申し上げます。（編集部）

☆時代の波には勝てず、ついにパソコンを買う決心をした。でも、携帯電話は絶対もたないぞ。意味のない意地をはりとおすことに、ある種の喜びを感じます。（かよ）

☆一周年を迎える職場では、施設外研修を計画している。一年を振り返り、自己洞察とこれからの目標を見つけ素晴らしい職場にしたいためだ。１０周年の今、何を思う？（美）

☆芦浜は白紙撤回！国の増設計画にもブレーキ、東海村ＪＣＯ事故の犠牲を教訓に。４月２６日、チェルノブイリ事故１４年目。なお続く被害を教訓に、稼働中の危ない原発をまず一機止めたい。（京）

☆郵政省の申請書を読みながら、コピー取りをがんばった。わ～い！楽しいな。（・。・）（あ）

☆「ポレーシェ編集」と「ボラ貯交付金申請」が重なる３月。二重の喜びに言葉もありません。超低金利のため、ボラ貯からは厳しい通達あり。どっこい、簡単に引き下がるようなチェル救ではありません。（Ｊ）